

## 第5類

# 大学英語授業におけるルーブリックを用いた指導と 学生のプレゼンテーションの変容との関連に関する一考察

泉谷 律子

IZUTANI Ritsuko

本稿の目的は、大学英語授業のプレゼンテーション活動において、ルーブリックの使用が教員の聴き手を意識したわかりやすいプレゼンテーションへの期待と学生のスラスラ読み上げることがプレゼンテーションであるという理解の隔たりを埋めることにどのように関わるのか、ということをも明らかにすることである。そのため 2019 年後期の口頭でのフィードバックによる介入が行われた授業と 2020 年前期のルーブリックによる介入が行われた授業のデータを量的および談話分析を含む質的分析によって比較した。分析データは、教員のフィールドノート、学生の提出資料および授業のビデオデータを用いた。その結果口頭でのフィードバックとルーブリックのいずれにおいても、すべての情報が活用されることはなく、どちらも個々の受講生の解釈により前景化するものと後景化するものがあることが明らかになった。さらに英語とその日本語訳の順序の扱いにおいてルーブリックを用いた 2020 年前期の授業の方が教員の期待により近い行為が観察された。

キーワード：英語教育、プレゼンテーション、ルーブリック、談話分析

## 1. 問題の所在

プレゼンテーション（発表）についての教員と学生および学生同士の理解に大きな隔たりがある場合がある。例えば、Shiobara(2020)では、日本の大学の比較文化の授業で初めてグループ内でのミニ・プレゼンテーションをするように指示されると、多くの学生が教員の期待とは裏腹にプレゼンテーション・ノートではなくエッセイを書いてきてそれを見ながら声を出して読み上げるために聴衆である学生との間にアイコンタクトがないことが問題とされている (Shiobara 2020)。Shiobara(2020)によれば、聴衆との間にアイコンタクトがないことは、「コミュニケーション力をつける」ことを目的の一つとする授業を効果的に進行させることへの妨げとなっている。筆者が非常勤教員として勤務する短期大学の2019年後期の「英語コミュニケーション」における発表においても、パワーポイントを使った

プレゼンテーションの経験者と未経験者におけるアイコンタクトの違いが観察された。経験者はある程度聴衆とのアイコンタクトがあったが、未経験者は下を向いて用意した原稿を読み上げるだけで聴衆を疎外しながら発表するという現象がみられた。それは、授業における学生相互間の学びを妨げる可能性がある。特に、2020年1月末から日本を席卷したコロナ禍においては、大学をはじめ教育機関では、休校、遠隔授業の採用、遠隔授業と対面授業への移行へのせめぎ合いなどより、クラスメイトを眼前にしたプレゼンテーションを授業に取り入れることが難しくなり、学生相互間の学びの機会が更に減少する事態となっている。

教員と学生との間における理解の隔たりはプレゼンテーションに限らないが、一般的にそのような隔たりを埋める解決法の1つとして、近年ルーブリックの使用が提唱されている。Stevens and Levi(2014)は「学期中のすべての課題を統合して解くような複雑な課題をこなして欲しいが、簡潔かつ明確に教員側の様々な

期待を伝える方法がわからない(p.3).」というような場合があるとし、具体的には、「シラバスに詳しい説明を書いているにもかかわらず、1クラスにつき、必ず2、3回は、どんな課題をしなければならないのかという質問が出る(p.4).」というように、単に詳細な説明をするだけでは、教員と学生の理解の隔たりを埋めることが困難なことを示している。Stevens and Levi(2014)はそのような場合の解決策として、課題に取りかかせる前にルーブリックを使って学生に授業中に議論させることで、はっきりと示されていない教員の期待を明示的に伝えることができる、という方法を論じている。

そこで、本稿では、「英語コミュニケーション」授業においてルーブリックを使う場合と使わない場合では、教員と学生のプレゼンテーションについての理解のギャップはどのように変化したのか、ということを経験における学生の変化を詳述することによって考察する。

## 2. 目的

本稿の目的は、大学英語授業のプレゼンテーション活動において、ルーブリックの使用が教員の期待と学生の理解の隔たりを埋めることにどのようにかわるのか、ということを経験観察データから明らかにすることである。田中(2011)によれば、「教師によってもたらされる「知識」が子どもたちの既有的知識体系とかけ離れていけば、そこに「葛藤」や「矛盾」が生じることになる。そして、この「葛藤」や「矛盾」を大切にすることで授業のダイナミズムが保証される。」(p.11-12)。従って本研究はプレゼンテーションについてのこのような教員と学生の理解の隔たりについてルーブリックを媒介しながら分析し、田中(2011)のいう葛藤や矛盾を克服していくプロセスの一端を明らかにするという意義をもつ。

## 3. 方法

本稿では、短期大学での2019年度英語コミュニケーション後期授業で行われたプレゼンテーションの中間発表から最終発表への学生の変化、および2020年度英語コミュニケーション前期授業で行われたプレゼンテーションの中間発表から最終発表への学生の変化を分析し、前者と後者の変化の比較を行うことによって、ルーブリックの使用が学生の行動の変容にどのよ

うに関わるかということ考察する。前者では中間発表の後に口頭のフィードバックによる教員の介入が、後者では中間発表の後に、ルーブリックとチェックリストによって教員の介入が行われた。教員の介入状況は表1に示した。2019年度後期と2020年度前期の両方の授業を受けた学生はいない。また、両授業とも、水曜の2限目である。

表1 教員の介入状況

	中間発表	最終発表
2019年後期	当日の口頭のフィードバック	事前の介入なし
2020年前期	事後のハンドアウトによるフィードバック	事前のルーブリックとチェックリストの提示

具体的な授業の内容を以下で述べる。2019年後期の英語コミュニケーション授業は、松柏社のテキスト『プラダを着た悪魔』で学ぶコミュニケーション英語」と付属のDVDを用いた全15回の授業である。授業のテーマと目標は、「職業、仕事とプライベートの両立などのテーマを扱う映画を題材にして、英語の実用表現や重要な文法項目、コミュニケーションに必要なスキルや文章校正力を身につけ、500語程度の英文と10分のプレゼンテーションで自分の言いたいことをわかりやすく伝えることができる。」というハードルの高いものだった。受講者(1年生31名)は第1~8回目、第10~第13回目は、毎回DVDをおよそ10分視聴しながら語彙やフレーズを学び、学んだ語彙やフレーズについての小テストを解いた。第9回目にプレゼンテーションの中間発表(事前のルーブリック提示なし)、第14回目に最終発表(事前のルーブリック提示なし)を受講者が5~7人のグループ単位で行った。受講生は内容によって、グループをさらにペアや3,4人のサブグループに分けて発表を行った。教員からプレゼンテーションの内容としてはテキストに関連することならなんでもよい、と指示がなされた。例として、各ユニットの授業でカバーしなかったテキストのDiscussion Topics, Did you know?などのコーナーや、ロールプレイ、登場人物、俳優や映画のロケ地のリサーチなどが教員から提示された。

2020年前期の英語コミュニケーション授業は、松柏社のテキスト、『グリー』で学ぶコミュニケーショ



ディスカッション・ミニ講義・リサーチプレゼン・その他)、パフォーマンスのテーマとテキストとの関連 (Unit番号, ページ番号, タイトル), パフォーマンスの形式(パワーポイントを使ったプレゼン, 模造紙や画用紙を使って歌詞を提示して歌うなど)を書くように指示した。当日は, 他の学生に発表者への質問やコメントを書かせ, フィードバックをさせた上で, 学生相

互に行った質問や応答を第8回の課題として提出させた。

また, 最終発表に先立って, 第13回目の授業内で評価のルーブリック(表3)を示し, その回の課題としてルーブリックを元にしたチェックリスト(表4)で進捗状況をチェックし, 進捗状況についてのコメントを書き, 予想得点を書いて提出するように求めた。

表3 2020年前期最終発表前に提示したルーブリック

	4	3	2	1
準備	べ切を守って原稿とスライドを提出、3枚以上のスライドか小道具などの準備、発表の練習をしている。	べ切を守って原稿とスライドを提出、3枚以上のスライドか小道具などの準備があるが、練習不足。	原稿とスライドをべ切後に提出、2枚以上のスライドか小道具などの準備があるが、練習不足。	スライドなどヴィジュアルも原稿も当日までに提出も準備なく、練習もしていない。
内容	よくリサーチしている、自分の意見や見方がはっきりして独自性がある。授業や発表の目的に合った内容。時間は1分以上。	リサーチはしている、切り口に独自性があり、授業や発表の目的に合った内容。時間は1分±20秒以内。	リサーチはあり、ある程度意見もあるが、発表の目的や授業と全く関連が示されていない。時間は1分±20秒以内。	リサーチが他の人と同じ内容か、自分の意見や見方がなく、既存のものをコピーしただけの内容。時間が40秒より短い。
視覚効果	ジェスチャー、小道具、アニメーションなどスライド上の工夫が2つ以上ある。音声を流すなどわかりやすい。	ジェスチャー、小道具、スライド、音声効果など1つは工夫がある。	スライドがあるが文字のみ。フォントサイズ、色などの工夫などもない。ジェスチャー、小道具、音声の工夫もない。	わかりやすくするようなヴィジュアルや音声上の工夫、ジェスチャー、指差しなどが全くない。
発表技術	聴衆へのアイコンタクトがずっとあり、音量大きく明瞭。英語は英語らしいイントネーション、強弱がある。	聴衆へのアイコンタクトと原稿見るのが半々、意味はすべて聞き取れる程度に明瞭。英語はある程度イントネーションがある。	聴衆へのアイコンタクトがたまにある、ところどころ不明瞭で声が小さい。英語は棒読み。	聴衆へのアイコンタクトが全くない、声が小さいか不明瞭でほとんど意味が聞き取れない、英語は棒読み。

表4 最終発表前に提出課題としたチェックリスト

第13回課題：最終発表 (第15週) 成績予測ルーブリック

英語コミュニケーション( ) 曜( ) 限 学籍番号( ) 名前( )

評価観点	できると予想したところに☑をつけましょう。	今はあなたの発表準備はどのような状況ですか? コメントを書きましょう。	得点予想 1~4
準備	<input type="checkbox"/> べ切(当日朝9:00)を守って原稿とスライドを提出した。 <input type="checkbox"/> 3枚以上のスライドか小道具などの準備をして、当日持参した。 <input type="checkbox"/> 発表の練習を十分にした。		
内容	<input type="checkbox"/> 発表によくリサーチしたことを含めることができた。 <input type="checkbox"/> 自分の意見や見方をはっきりと説明できた。 <input type="checkbox"/> 授業や発表の目的に沿った内容だった。 <input type="checkbox"/> 1分以上で発表することができた。		
視覚効果	<input type="checkbox"/> ジェスチャーや指差しなどをよく使った。 <input type="checkbox"/> スライドには、画像、フォントの色やサイズ、アニメーションなど見やすい工夫をした。 <input type="checkbox"/> 小道具をつかってわかりやすくする工夫をした。 <input type="checkbox"/> 音声を流すなど工夫をした。		
発表技術	<input type="checkbox"/> 終始、聴衆へのアイコンタクトをしていた。 <input type="checkbox"/> 音量大きく明瞭に話した。 <input type="checkbox"/> 英語の部分は英語らしいイントネーションと強弱をつけた。		

計16点中( )点



## 5. 結果

### 5.1 2019年後期中間発表から最終発表への変化：ロールプレイ

量的観点からみると、まず形式では中間発表でロールプレイを選択した受講生は3組11名であり、最終発表でロールプレイを選択した受講生は4組12名（うち1名は重複）と変わらないものの、中間発表でパワーポイントによる発表を選択した受講生は0名であったが、最終発表でパワーポイントによる発表を選択した受講生は7組16名、画用紙による発表を選択した受講生は1組2名となった。次に発表時間については、中間発表平均1分20秒から最終発表平均1分22秒と2秒長くなった。ただし、最終発表でスライドが教室のコンピュータと合わず発表できずに、後日ビデオを送ってきた3名は平均から除外した。

以下ではまず、ロールプレイを選択したグループの変化をグループごとに質的に検討する。Eグループは中間発表では1組目は原稿を少し暗記し、棒読みだが、笑顔を見せ、2組目は発表者同士のアイコンタクトがなく、視線を下に向け原稿を棒読みし、意味が伝わらない。発表後に口頭で行った教員のフィードバックの内容は、発表直前の聴衆への場面の説明や役割の説明の追加、椅子やテーブルなど小道具の使用、声を張る、原稿はできるだけ覚える、場面の写真をスクリーンに提示するなどのアドバイスだったが、最終発表でも、1組目、2組目ともに役割紹介、場面紹介、立ち位置など教員が指示するまで行わなかった。1組目は最終発表では原稿を覚え、発音やイントネーションもある程度練習しているという変化が見られた。笑顔で正面を向いているが、発表者同士のアイコンタクトやジェスチャーも中間発表と同じくなかった。終わった合図にお辞儀をしているという変化はあった。2組目の最終発表は声が小さく、正面は向いているが、ジェスチャーや発表者同士のアイコンタクトがなかった。さらに3人のうち1人は原稿を暗記しているが、2人はメモを単調に読み上げることに終始していた。

Dグループのロールプレイは中間発表では、1人で複数の役割を兼ねていて複雑すぎ、ステージ上で相談をしている時間が長かった。テキストのセリフを棒読みで延々と読んでいて、自分たちの間違いを楽しそうに笑ったりしているが、何が読まれているのかわからない。いろんな場面を使っているのに聴衆に今どの場面のロールプレイをしているのかが伝わっていないように見て取られるため、教員の口頭でのフィードバック

では、ロールプレイの前の聴衆への場面設定と役割の説明、いらぬセリフや細かい人物設定の削除、必要ならセリフの追加と整理、場面転換にパワーポイントの利用、役名の札の利用、聴衆に状況がわかるような立ち位置、ジェスチャーや空間上の工夫などのアドバイスをした。最終発表ではEグループと同じく、教員が促すまで場面の説明、立ち位置の移動は行われなかったが、2つのサブグループに分かれて、1組目は役割の名札を作ったり、原稿を覚えたりするなど改善が見られた。2組目は原稿を持っているが、発表者同士で向かい合わせの立ち位置になっていて、途切れなくアイコンタクトをし合い、お互いに話している体をなしている。上記の結果より、2019年後期のロールプレイでは、原稿を多少暗記する、お辞儀をする、発表者同士のアイコンタクトをするという点において学生のプレゼンテーションに少し変化が伺えた。学生の提出したシャトルカードの記述を見ると、Eグループでは中間発表後では「かむことなく」「スラスラ読むこと」ができたことを良い結果としたり、「しっかり覚えて発表できるよ」頑張ることを目指したりしていることが伺える。さらに最終発表後は「覚えるのは苦手なので、目前にたくさん読んで練習」したことを報告し。感情をこめることは難しかったが、「スラスラ」読めたなどのように「スラスラよむ」「覚える」ということに学生の意識が前景化していた。Dグループでは中間発表後、役割分担が上手ができずスムーズに進めることができなかったと自省し、最終発表後は「みんなでアイコンタクトをとり」最後まで読み切ったことを良いとしているように役割分担とアイコンタクトを意識しているのが伺えた。

まとめると、2019年後期のロールプレイ形式の発表では、教員の口頭での介入の中で多くの学生が最も焦点を当てたのは原稿を覚えるという点であり、アイコンタクトを改善しようという意識をもつに至るには個人差が見られた。ここからロールプレイについての学生の理解は、原稿を覚えスラスラと読むということが中心であり、場面設定、ジェスチャーやパワーポイントの助けを借りて聴衆に分かりやすく状況を提示するという教員の理解とは、口頭でのアドバイスの後であっても大きく隔たりがあると言えよう。

### 5.2 2019年後期中間発表から最終発表への変化：パワーポイント発表

中間発表では原稿を読み上げたが、最終発表ではパ

ワーポイントに変えたCグループについて以下で検討する。中間発表では、1組目はロケ地をリサーチし、店や博物館ホテルやレストランに至るまで細かく調べているが、原稿を持ち上げて読み、聴衆とのアイコンタクトはなく時々つまっていた。2組目もロケ地について発表し、原稿を持ち上げて読み、アイコンタクトがなく声量と明瞭さが足りなくて聞こえにくい。内容はよく調べている。3組目は出演俳優についてリサーチはよくしているが、原稿をポディウムに置いて読むのでアイコンタクトはない。時々つまがるが、声量があるので聞こえやすい。教員のCグループ全体への口頭のフィードバックでは、ロケ地なら地図の追加、表紙に名前とタイトルの提示、写真への英語のキャプションや説明の追加、アイコンタクト、スクリーンへの指差しとジェスチャーなどのアドバイスをした。更に原稿を覚える、できる範囲で**This is~. There is ~.** など英語を使う、声量を上げるなどと注意した。

最終発表では、このグループはパワーポイントにロケ地の写真が満載であった。1組目は、店の特徴や詳細を良く調べて紹介し、映画のシーンとの関係も説明していた。声が明瞭で、キャプションは英語、スクリーンには写真とキャプションのみでスクリーンを読み上げたりせずに手元のメモを見て発表している。ただ、聴衆へのアイコンタクトはなかった。2組目は、**My name is~.**と自己紹介に英語を使う。キャプションは日本語だが、映画のシーンとの関係も説明し、1組目と同じく、スクリーンには写真とキャプションのみで、メモを見て発表した。声量は十分だがところどころ不明瞭で、聴衆にはアイコンタクトはない。3組目は、冒頭で **Hello, everyone. My name is~. We are going to talk about~.**と英語を使い、2人とも1枚目の画用紙の表に日本語の文章、写真、イラストを見せ、画用紙をパートナーが読み手の前に掲げて読み手は画用紙の裏に書いた英語の原稿を読むという工夫をしている。声は明瞭だが、視線は下か原稿のみで、聴衆にアイコンタクトはない。学生のシャトルカードの記述からは、中間発表後は、最終発表で「しっかり」話せるようにしたいと気持ちをひきしめたり、リサーチができている他のグループと自らのグループを比較し反省したり、声量は十分だが原稿の暗記ができていないので「次の本番までに」暗記しておくとか決心したり、リサーチは「しっかりできていた」ので、さらにパワーポイントの作成と英語訳を「頑張りたい」などとあり、最終発表後は「しっかり」リサーチや英訳ができていたので、更に

「英語で言えばよかったと思った」と可能性を感じたり、プレゼンテーションの難しさを改めて感じたり、「がんばってつくった」パワーポイントによる発表や「割とがんばれた」「しっかり」できたリサーチに遣り甲斐を感じていたり、「紙で上手に英語で発表することができ」「成功した発表」だと自己評価するなど概ね内容と形式において達成感を示した記述がみられた。中には中間発表後から「本番では、みんなが初めて知るようなことを紹介したり、スピーチに飽きない工夫ができたらいいなと思った」と、聴衆を意識した記述もあった。まとめると、2019年後期のリサーチ発表では、教員の口頭での介入の中で多くの学生が焦点を当てたのはパワーポイントや紙などの視覚効果のある資料に英語を入れて「しっかり」作成し、原稿を覚え、「しっかり」話すという点であり、プレゼンテーションへの理解もそのようなものであるということがうかがえる。英語で聴衆に呼びかけるパフォーマンスもあったため、教員の口頭でのアドバイスのうち、アイコンタクト、指差し、ジェスチャーなどの身体的な要素は学生には重要視されていなかったが、アイコンタクトを含めて聴衆に向かっているという意識には個人差が見られたと言えよう。

以下では、質的分析をさらに精緻にするために、ビデオデータの書き起こしから談話分析を行った。分析では、英語と日本語の両方で発表した場合の英語の扱い方および英語と日本語の順番に着目し、そのような場面が顕著に示されたAグループのうちのサブグループのブランドの歴史についての発表からの抜粋とCグループのうちのサブグループの出演女優についての発表からの抜粋を示す。抜粋中ではA~Dは特定の学生、Tは教員、S?は不特定の学生、SSは全ての学生を表す。書き起こし記号については本文末に示した。本研究では本人が英語で話している意図があると判断した発話は、英語らしい発音であるかどうかにかかわらずすべて英語表記とした。

AグループのうちAとBのペアは映画に出てくるブランドについて調べ、中間発表で原稿を読みながら発表をした。以下の抜粋1はその冒頭の場面である。この場面でAは原稿を読みながら、映画の中に出てくるブランドの会社について調べた内容を日本語のみで羅列しながら述べている。

抜粋1

2019年度英語コミュニケーション後期授業 中間プレゼンテーション  
 S1340002 00:21:15-00:22:00  
 A: (紙を持ち上げて読む視線は紙に当たっている) えっと映画の中に出てくる( )は本社がフランス パリにあり設立は19( )です  
 B: (Aの持っている紙を顔を上げてのぞき込む)  
 A: (業種)はファッションで事業内容はオートー  
 B: (髪をかき上げる)  
 A オートクチュール ( ) アクセサリージュエリー ( )です  
 B: (紙をのぞき込む)  
 A: 店舗数は約( )店舗あるそうです 日本には1980年10月7日にやってきたそうです (業種)は(ファッション) や事業内容は( )製品の販売 ( )です(紙を指差す)

以下の抜粋2はAグループの中間発表が終わったのちに教員(T)が口頭でコメントを述べた場面である。Tは表紙にタイトルと名前を英語で入れるように、また、パワーポイントの内容をできるだけ英語で入れるようにと口頭でアドバイスをしている。

抜粋2

2019年度英語コミュニケーション後期授業 中間プレゼンテーション  
 S1340003 00:00:00-00:10:26  
 T: パワーポイントで そしたらわかりやすくなると思うので えと パワーポイント他の人もパワーポイントで発表する人は最初に表紙 °をつけてください表紙°表紙にタイトル自分の名前を英語で入れてください shoe size とかねそういうふうに入れてもらって それからえっと ま 今日日本語で発表しているんですけどパワーポイントまあ英語の授業なのでパワーポイントの内容はできるだけ英語で入れて下さい  
 S?: え  
 T: あの日本語でできるだけ英語に変える英語で調べた英語で( )してもらってえとそうですね

以下の抜粋3はCグループの後でもTが再び英語に関してアドバイスをしている箇所である。

抜粋3

2019年度英語コミュニケーション後期授業 中間プレゼンテーション  
 S1340003 00:16:58-00:21:34  
 T: はい良く調べてくれたのでじゃあCグループの人はえと!!!どうやって発表しますか  
 S?: パワーポイント  
 T: パワーポイントで発表してくれる はい そしたらえっとできれば地図つけてほしいですどこに何があるか ま えっと ニューヨークの街の中でもいいし ( )し地図つけたいならみんなわかりやすいんじゃないかな:~と思います で え さっきもいったようにパワーポイントの人は表紙つけて(その)表紙に自分の名前も英語で入れて下さい で写真を入れたら写真だけをばんと出すんじゃなくて写真にキャプションをつけて 説明もつけてほしい その説明は英語で できるだけ英語で( )で えっとパワーポイントの人もアイでできるだけアイコンタクト みんなの方を向いて で このパワーポイントだったらパワーポイントをちゃんと こう 手で指さして説明する 下向いて原稿を読むというよりも指差してできるだけ原稿も覚えて説明 みんなにわかるように説明してくれたら( )ます で 簡単な英語はもう使ってほしい(んです) this is なになにとか there is なになにとかできる範囲で英語を使って( )それで女優さんの方なんですけど ちょっと BグループとCグループと話を聴いたらじゃあえっとどうしようかな 家族のことと 代表作とか映画のことがそしたら えと メリルストリープとアンハサウェイの 仕事 役作りとか仕事のこととか(言ってくれたので) どちらかという他の映画出た映画( )

以下の抜粋4は最終発表でAが中間発表と同じ箇所を、パワーポイントを使い英語を交えてプレゼンテーションしている箇所である。該当部分のパワーポイントはすべて日本語である。

抜粋4

2019年度英語コミュニケーション後期授業 2020年1月29日 最終プレゼンテーション  
 S1370001 00:20:32-00:22:00  
 A: (マイクで) 次にブランドの歴史について説明します (スクリーンが CHANNEL に代わる)  
 B: (PCから離れて教卓に戻り、教卓の紙を指差す)  
 A: シャンネル の本社が main office が (ST がスクリーンを指差す) フランス パリ 設立 (ST が紙を指差す) foundation (スクリーンを見る) 1909年 (視線を落とす) one thousand nine hund hundred nine 業種 industry type fashion 店舗数 number of stores three hundred ten です

Aは「本社」の後でそれにあたる英語「main office」といい、「設立」に続けてその英訳「foundation」、「1909年」に続けて英語で「one thousand nine」「hundred nine」と言い、「業種」に続けて「industry type」、「店舗数」に続けて「number of stores」と言うように、日本語の単語を言った後にそれと同義の英語を言っている。

聞いている学生は日本人であるために日本語の単語は理解できるので、この発表者の行動は聴衆に英語で説明しているという意味はない。その後の発表も同じように進行している。Tの、できるだけパワーポイントに英語を入れるように、というアドバイスの解釈を、AとBは、パワーポイントは日本語で書き、口頭で英語を続けて付け加える、という発表の仕方をするという行動で示している。

AとBの提出したシャトルカードを見ると、中間発表後「みんなの発表を聞いて自分たちももっと頑張ろうと思いました」という記述があるのみで、最終発表後も合わせてそれ以外に「みんなの発表」「他のグループの発表」への言及や感想に終始していた。

5.3 2020年前期中間発表から最終発表への変化

量的観点からみると、形式では中間発表で原稿を読み上げて発表した受講生は発表者26名(全受講者29名、未発表3名)中20名、パワーポイントによる発表を選択した受講生は6名であったが、最終発表で発表者28名(全受講者29名、未発表1名)中原稿を読み上げた受講生は7名、パワーポイントによる発表を選択した受講生は21名となった。発表時間については、中間発表はビデオを撮っていないためカウントできなかった。最



最終発表の発表時間の平均は1分27秒であった。教員からのフィードバックとしては、中間発表の直後に大学のシステム上に「中間発表のコメントと最終発表へのアドバイス」を提示し、受講生にその旨をハンドアウトで読んでおくように指示した。そのハンドアウトの中に「歌詞の自分なりの意味や解釈、意見」やディスカッションへの「賛成/反対意見と自分の結論」、「できればスライドなどビジュアルをつけてほしい」「聞き手へのアイコンタクトがないと聞きづらい。声量を大きく（マイク使用OK）明瞭に話し、ジェスチャーや小道具、写真など、わかりやすくする工夫が必要」などを含めた。しかし、コロナ禍の対策として急遽取り入れられたシステムを利用しての教員と全員の受講生とのコミュニケーションが行き届かず、このアドバイスをシステムからダウンロードして全員が読んでいたかは確認できない。ループリック（表3）は前述したように最終発表前に授業中に提示をして説明していた。チェックリスト（表4）はシステムに教員がアップロードしたものを受講生がダウンロードして書き込み提出するという形式であり、提出は受講生29名中12名にとどまった。

中間発表のアイコンタクトについては、教員のフィールドノーツの個々の発表の記述には全く書いていないが、最後のメモに「・マイク使う ・視覚効果—ヴィジュアル ・内容 声の ・アイコンタクト」とあるため これを元に書いた「中間発表のコメントと最終発表へのアドバイス」の記述から見るとアイコンタクトについて発表者全員に注意すべきだと教員は当時考えていた。すなわち発表者のアイコンタクトはあまりできていなかったと判断できる。最終発表のアイコンタクトについてはループリックを使った評価票の集計から「聴衆へのアイコンタクトがずっとある」者が1名、「聴衆へのアイコンタクトと原稿を見るのが半々」である者が3名、「聴衆へのアイコンタクトがたまにある」者が8名、「聴衆へのアイコンタクトが全くない」者が16名であった。つまり、最終発表ではアイコンタクトの改善はあまりなされていなかったと言えよう。

声量については中間発表のフィールドノーツでは、「ききとりにくい」という記述が2箇所、声量が大きく良く聞こえることや明瞭さに言及しているところが6箇所あった。フィールドノーツの最後のメモからは声の大きさや明瞭さを問題視し、「練習しているか？」とあるため、これを元に書いた「中間発表のコメントと最終発表へのアドバイス」の記述から見ると6名は声量が

十分であったもののこれについても発表者全員に注意すべきだと教員は判断した、すなわち概ね発表者の声量が足りていなかったと思われる。最終発表のループリックを使った評価では「声量大きく明瞭」な者が21名、「意味はすべて聞き取れる程度に明瞭」な者が6名、「ところどころ不明瞭で声が小さい」者が1名、「声が小さいか不明瞭でほとんど意味が聞き取れない」者は0名であった。この結果発表者はほとんどが声量については改善したと言える。発表者は全員マイクを使っていた。

質的観点からは、2019年後期最終発表と比較するために、歌の紹介における英語と日本語の順番に着目して抜粋する発表場面を選んだ。抜粋5は最終発表で、Cがパワーポイントを使って歌を紹介している場面である。Cの中間発表について、教員のフィールドノーツの記述では「I Kissed the girl 読み上げ 印象 同性愛？カミングアウト？解釈 声をはっきりよく聞こえる」とありCの最終発表の内容は中間発表の内容を発展させたものである。

#### 抜粋5

2020年度英語コミュニケーション前期授業 2020年8月5日 最終プレゼンテーション  
S1620003 00:08:13-00:10:46

C: (前のめりになり視線はPCの画面に置きながら、マイクを持ち左右にゆっくり降る)

(スクリーンを瞬振り返り、PC画面に視線を戻す)

私が紹介するのは (姿勢をただす) あ'(C) です 私が紹介したいのはケイティ・ペリーのI kiss a girl です で ケイティ・ペリーというのは

(スクリーン上部に女性の写真が2枚映し出される)

C:=この人で この(歌は簡単に言うと)女の子にキスした(いや)じゃなくてむしろはまってしまうそうなくらいいい気分になるっていう(過激的な)ことで それで (スクリーンの写真が消える)

C: でこの中で私が印象に残った歌詞が

(スクリーンに文字が現れる)

C: I kiss a girl I like it という 女の子に意味が 女の子にキスをした 気に入った (というので) もう一つが as girls we are so (magical) 私たち女の子って魅力的 不思議な存在という(な) けど ( ) ですよ たぶん (笑い) (女の子) 最初聞いたときは同性愛者と思って ケイティ・ペリーのカミングアウト ( ) 思ったけど 別にそういうんじゃないで キスしたこと あの 自分の恋愛対象が女性っていうことに気づいたとかっていうメッセージがこめられてると思ったんだけど( ) キスしたんだと思うで ( ) インパクト強すぎて賛否両論ともあって同性愛者たちからは(自分たちが) 応援されてるみたいな解釈とかしてる人とかあったけど ケイティ本人曰く そんな歌じゃないと自分がやったことを感じたことを(歌に) (という) ことでこの歌を通して私は女の子は同性からも ( ) になれるキスするすごい良い感じ魅力があるという 女の子は特別な存在っていうメッセージがこの歌にはこめられているのかなと思いましたが E E ほんで E グリーは(ティナとサンタナ) あったんですけど私はサンタナの方を(見)てほしいです。サンタナはレズビアンでカミングアウトしていないのに学校のみんなに知れ渡ってすぐくち辱されます だけどグリーのみんなが助けに入ってこの歌を歌いはじめます その時サンタナはすごいカッコよくて この歌はすごい賛否両論あるんかしらんだけどこの歌で背中を押されている人もいるんか私は思いました ぜひ聞いてみて下さい 終わります

SS: (拍手)

Cは歌の英語の歌詞「I」「kissed a girl I like it」に続けて「女の子にキスをした 気に入った」と日本語訳を言い、「as we are girls we are so (magical)」に続けて「私たち女の子って魅力的 不思議な存在」という日本語訳を言う。これは、聞いている日本人の学生



が英語の歌詞の意味を理解する助けになるように英語の歌詞に続けて日本語訳を述べているのだということが言える。言い換えると、Cは発表を聴いている学生を意識した言語行為をしている。

また、抜粋5ではCが、頻繁に「私」「思いました」を使っていることにも注目した。Cは「私が」「紹介するのは」「私が」「紹介したいのは」と言うことで発表を始め、「私が印象に残った歌詞は」と歌のフレーズを紹介し、「この歌を通して私は」「思い」「ました」「私は」「見てほしいです」「と私は思いました」と頻繁に「私は」を使って発表の内容に自らの意志が関与しているということを前景化している。このデータから、Cは表1のルーブリックの評価観点のうち項目「内容」にある「自分の意見や見方がはっきりしていて独自性がある」という記述に影響されたということは言えるだろうか。ただ、Cはチェックリストを提出していないため、ルーブリックの記述をどこまで意識していたかはこれだけでは推し量ることはできない。またルーブリックが提示されていない中間発表でも最終発表と変わらない内容である、ということを見比べるとルーブリックやチェックリストの介入がCの発表の独自性に影響したと結論付けることは難しい。

当日授業の終わりに提出したCの自己評価は「こんな風な発表をするのは初めてだったからボタン押すのも、難しく自分が思っているような発表じゃなくて、英語の発音もできてなくて思うようにいかなかったです」というもので必ずしも達成感を示していない。この記述からCの「自分が思っているような発表」はパワーポイントの操作がスムーズに出来て英語の発音が「できている」プレゼンテーションであることがうかがえる。

次の抜粋6はDが読み上げでディスカッショントピックに基づいて発表している場面である。Dの中間発表について、教員のフィールドノーツの記述では「読み上げ Discussion 私はあまり料理をしません」とあるため、以下の抜粋6に見られるDの最終発表の内容は中間発表の内容を発展させたものである。

#### 抜粋6

2020年英語コミュニケーション後期授業 2020年8月5日 最終プレゼンテーション  
S1620002 00:18:11~00:20:32

D：(マイクを持って話す) あ XX 番 D でスライドスライドないで言葉 ( ) します

SS：(拍手)

D：と (下を向いて話す) ディスカッショントピックユニット5ユニット5 (携帯の画面を見ながら話す) の33ページディスカッショントピックです Rachel says her sugar cookies are famous is there any food that you are really really good at making what is your ( ) この訳はレイチェルのシュガークッキーが有名なそうです ほんとうに得意な料理ありますかあなたの看板料理は何ですかという意味です私の答えは

I don't cook often so there an' any dish I can make but an' o my specialties is the Korean Dish Toppogi an' I can make Toppogi Sauce 私あこの訳は私は頻繁に料理はしないので作れる料理はあまりないです その少ない料理の中で得意料理の一つは韓国料理のトッポギですトッポギのたれは自分で作ることができます えっとクラスメイトからの質問でオリジナルソースはどうやって作っていますかあ How do you make the original sauce for Toppogi?

その答えがコチュジャン大きじ3はちみつ大きじ1しょうゆ大きじ1鶏がら小さじ1から2辛いのが好きなのでコチュジャンというトウガラシのたれを多く入れていただきますだれにも食べてもらったことがないので食べてもらって感想を聞きたいです (顔をあげる) 発表を終わります : : ず

SS：(拍手)

Dはテキストの Discussion Topic の英語の質問「Rachel says her sugar cookies are famous is there any food that you are really really good at making what is your ( )」に続けて「レイチェルのシュガークッキーが有名なそうですほんとうに得意な料理ありますかあなたの看板料理は何ですか」と日本語訳を言い、その質問に対する自分の英語による返答「I don't cook(ie) often so there an' any dish I can make but an' oh my specialties is the Korean Dish Toppogi an' I can make Toppogi Sauce」に続けて「私は頻繁に料理はしないので作れる料理はあまりないですその少ない料理の中で得意料理の一つは韓国料理のトッポギですトッポギのたれは自分で作ることができます」という日本語訳を言う。これは、前述のCと同じく聞いている日本人の学生が英語の意味を理解する助けになるように英語に続けて日本語訳を述べているのだということが言える。つまり、Dも発表を聴いている学生を意識した言語行為をしている。次のクラスメイトからの質問「オリジナルソースはどうやって作っていますか」を先に述べて次に英語「How do you make the original sauce for Toppogi?」を言っているのが、一見抜粋4のAおよびBと同じ行為をしているように見える。しかしこれに関しては日本語と英語の間でDは「あ」と言っているのがD本人は日本語を述べた後に順序が間違いだったことに気づいたことを示しているようである。したがってDiscussion Topicの質問とその自分の返答を述べたときの順序である英語→日本語

訳という順序をDが志向していたということとは矛盾しないと言える。

## 6. 考察

本章では「英語コミュニケーション」授業においてルーブリックを使う場合と使わない場合では、教員と学生のプレゼンテーションについての理解のギャップはどのように変化したのか、ということを経験から考察する。

まずプレゼンテーションについての教員の期待は、ルーブリックに示したように、準備、発表の練習をしていること、よくリサーチしていること、自分の意見や見方がはっきりして独自性があること、授業や発表の目的に合った内容であること、聴衆の理解を助けるための視覚効果や音声など言語以外の工夫があること、聴衆へのアイコンタクト、声量が大きく明瞭で、英語の部分は英語らしいイントネーション、強弱があるということであった。つまり、教員は発表者には独自の視点から調べた内容を含んだ、聴き手を意識したわかりやすいプレゼンテーションを期待していた。

ただし、2019年度後期はこのような教員の期待は、ルーブリックを使わずに中間発表直後に口頭でのフィードバックで伝えられていた。その結果、中間発表から最終発表にかけての学生の変化を見ると、中間発表ではパワーポイントでの発表を予定していた受講生は全くなかったのに対し、最終発表でパワーポイントによる発表を選択した受講生は大きく増加し、ロケ地や俳優についてリサーチが詳しく授業の内容に合っていたが、アイコンタクトがなく聴衆を意識していたというよりは発表をすることで精一杯であったことが伺える。聴衆のことを考える余裕が少なかったというのは、談話分析で示したように日本語を先に述べてその後英語を加えるという、聴衆にとっては無意味な順序に顕著に表れていた。さらに英語そのものについては「すらすら読む」ということが発表者にも聴衆であるクラスメイトにも重要とされており、聴衆への意識は前景化されていなかった。

以上と比較すると、ルーブリックによって中間発表後に教員の期待を伝えた2020年度前期は、最終発表ではパワーポイントを選択した受講生が大半となり、アイコンタクトは最終発表でもほぼなかったものの、ほとんどの発表者がマイクを使い聴衆が十分聞き取れるような声量で話していた。さらに談話分析で示したよ

うに歌詞やディスカッションの内容を英語で先に述べその後日本語訳を加えるというように、クラスメイトにとって意味のある順序で発表していたということからも聴き手を意識していたということが言える。ただし、ルーブリックには、英語については「英語は英語らしいイントネーション、強弱がある」「英語はある程度イントネーションがある」「英語は棒読み」という記述があるのみで、英語と日本語訳の関係やその順序については一切記述がない。それにもかかわらずルーブリックの評価項目の中で「発表技術」の一部である声量を意識することによって、聞き手を意識することにつながり、そのことがルーブリックの記述にはない英語とその日本語訳の順序にも影響したということが言えそうである。

2019年後期の口頭でのフィードバックと2020年前期のルーブリックのいずれにおいても、すべての情報を受講生が最終発表に活用することはなかった。どちらも受講生の解釈に任せ、個々の受講生が前景化するものと後景化するものがあつたが、評価観点が大きく分類された中に細かい情報があつたルーブリックを用いた2020年前期の方が教員のプレゼンテーションへの期待と学生の理解のギャップを多少埋めることに貢献したと言えるのではないかと。

以上から、ルーブリックを用いた指導によってプレゼンテーションを課題とする授業の効果を具体的に述べると、ルーブリックを用いなかった授業では、学生のプレゼンテーションへの理解は準備段階での詳しいリサーチや原稿を覚えてスムーズに話すことに留まっていたが、ルーブリックを用いた授業では、パワーポイントの使用や十分聞き取れる声量、英語の後に日本語訳を提示するなど、クラスメイトが理解しやすいようなプレゼンテーションをすることへの志向を受講生がつけたことである。言い換えるとプレゼンテーションを使って聴き手とコミュニケーションを成立させようという志向性を学生がある程度備えることができた、ということである。

## 7. まとめ

本稿の目的は、大学英語授業のプレゼンテーション活動において、ルーブリックの使用が教員の期待と学生の理解の隔たりをどのように埋めることができるのか、ということを経験観察データから明らかにするこ

とであった。研究としての今後の課題としては2つの授業のデータの内容とその年度の状況が異なり、比較が十分にできなかったことである。より内容と状況に近い授業実践の比較分析によって今後深い考察に繋げていきたい。

さらに授業実践としての今後の課題としては、本稿の分析の結果、ルーブリックでアイコンタクトの必要性を明示的に伝えたにもかかわらず、中間発表と最終発表という2回の発表機会では聴衆にアイコンタクトをつけるということが相当困難であるということが明らかになったということである。次回の授業実践では、アイコンタクトを重視したごく短い発表練習の回数を増やし、人前で英語を交えて話すことに慣れた上で最終発表に臨ませるなど改善した指導が必要になるだろう。

### 8. 引用文献・参考文献

McKenna, A. B. (2016). Communicate in English with The Devil Wears Prada 『プラダを着た悪魔』で学ぶコミュニケーション英語』角山輝彦・Simon Capper 編著, 東京: 松柏社

西岡加名恵・石井英真(2018) 『Q&Aでよくわかる! 「見方・考え方」を育てるパフォーマンス評価』東京: 明治図書出版

Shiobara, F. (2020). Using Action Research to Implement Active Learning in a Comparative Culture Lecture Class. 神戸松蔭女子学院大学研究紀要 Journal of Kobe Shoin Women's University (1), 27 - 40. <http://id.nii.ac.jp/1044/00002176/>

角山照彦・Capper, Simon(2018) Communicate in English with glee: New Directions 『「グリー」で学ぶコミュニケーション英語』東京: 松柏社

Stevens, D.D. & Levi, A. J. (2014) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』佐藤浩章監訳、井上敏憲・侯野秀典訳、玉川大学出版部

田中耕治編著(2011) 『パフォーマンス評価—思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい

### トランスクリプション記号

° あ °	周辺より小さい声の発話	あ	周辺より強調された発話
( )	不明瞭な発話	:	直前の音の引き伸ばし
( )	ジェスチャーなどの記述	£あ£	笑いを交えた発話

### Appendix1

2019年度後期中間発表

グループ	人数	形式	データ番号	データ位置	長さ
E	3	ロールプレイ	S134001	00:42-01:59	1分17秒
E	3	ロールプレイ	S134001	02:12-04:41	2分29秒
B	3	原稿読み上げ: ハーバード大学	S134001	10:59-14:07	4分8秒
B	2	原稿読み上げ: 大学 Big 4	S134001	15:52-18:04	2分12秒
D	5	ロールプレイ	S134002	01:34-15:22	13分48秒
A	2	原稿読み上げ: ファッション	S134002 S134003	21:22-21:47 00:00-02:24	2分49秒
A	2	原稿読み上げ: 靴サイズ	S134003	02:51-04:15	1分24秒
A	2	原稿読み上げ: 女優	S134003	04:26-08:31	4分5秒
C	2	原稿読み上げ: ロケ地フランス	S134003	12:02-14:50	2分48秒
C	3	原稿読み上げ: ロケ地フランス	S134003	14:50-16:42	1分52秒
C	2	原稿読み上げ: 女優	S134003	17:03-18:48	1分45秒

### Appendix2

2019年度後期最終発表

グループ	人数	形式	データ番号	データ位置	長さ
A	2	PPT発表: ブランドの歴史	S1370001 S1370002	20:31-22:30 00:00-03:38	4分37秒
A	2	PPT発表: 女優	S1370002	09:38-15:02	5分24秒
A	2	PPT発表: いろいろなサイズ	S137002	18:10-19:55	1分45秒
E	3	ロールプレイ	S137002	01:15-04:24	3分9秒
E	3	ロールプレイ	S137002	05:23-08:06	2分43秒
C	2	PPT発表: ロケ地 NY	S137003	15:22-19:59	4分37秒
C	3	PPT発表: ロケ地 NY/Paris	S137003 S137004	21:49-22:00 00:00-03:39	3分50秒
C	2	紙で発表: 女優	S137004	05:52-09:33	3分41秒
D	3	ロールプレイ	S137004	12:38-15:08	2分30秒
D	3	ロールプレイ	S137004	16:09-17:15	1分6秒
B	2	PPT発表: アメリカの大学	S137004 S137005	19:58-22:00 00:00-01:21	3分23秒
B	3	PPT発表	後日ビデオ送付		



## Appendix3

2020年度前期中間発表

No.	形式	内容	相互質問 提出	チェックリスト提出
1	読み上げ	歌紹介	提出	チェック
2	読み上げ	映画紹介	提出	チェック・コメント・予想得点
3	読み上げ	映画紹介	提出なし	提出なし
4	読み上げ	歌紹介	提出なし	提出なし
5	読み上げ	Discussion	提出	チェック・コメント・予想得点
6	読み上げ	歌紹介	提出	チェック・コメント・予想得点
7	PPT	Discussion	提出	チェック・コメント・予想得点
8	読み上げ	Discussion	提出	提出なし
9	読み上げ	歌紹介	提出なし	チェック・コメント
10	読み上げ	歌紹介	提出	提出なし
11	PPT	Discussion	提出なし	提出なし
12	読み上げ	歌紹介	提出	提出なし
13	読み上げ	歌紹介	提出なし	提出なし
14	読み上げ	歌紹介	提出なし	チェック・コメント・予想得点
15	読み上げ	歌紹介	提出なし	提出なし
16	未発表		提出なし	提出なし
17	読み上げ	映画紹介	提出	提出なし
18	PPT	歌紹介	提出なし	提出なし
19	読み上げ	歌紹介	提出	チェック・コメント・予想得点
20	PPT	歌紹介	提出	提出なし
21	読み上げ	Discussion	提出なし	チェック・コメント・予想得点
22	未発表		提出なし	提出なし
23	未発表		提出なし	提出なし
24	PPT	歌手紹介	提出なし	提出なし
25	PPT	強迫性障害	提出	チェック・コメント・予想得点
26	読み上げ	歌手	提出なし	提出なし
27	読み上げ	歌手紹介	提出なし	チェック・コメント
28	読み上げ	Discussion	提出なし	チェック・コメント・予想得点
29	読み上げ	歌紹介	提出なし	提出なし

読み上げ=20名 PPT=6名 未発表=3名 合計29名

## Appendix4

2020年度前期最終発表

No.	形式	内容	データ番号	データ位置	データ長さ
29	PPT	歌紹介	M1620001	1:16-03:06	01:50
28	PPT	Discussion	M1620001	4:10-6:20	02:10
27	PPT	歌紹介	M1620001	6:26-8:28	02:02
25	PPT	LGBT	M1620001	9:31-11:57	02:26
26	読み上げ	歌紹介	M1620001	12:45-13:57	01:12
24	読み上げ	歌紹介	M1620001	17:03-17:46	00:43
23	PPT	歌紹介	M1620001	19:34-21:41	02:07
18	PPT	歌紹介	M1620002	00:37-01:44	01:07
17	PPT	歌紹介	M1620002	02:44-03:57	01:13
11	読み上げ	歌手紹介	M1620002	05:06-06:38	01:32
5	PPT	Discussion	M1620002	07:32-09:11	01:39
12	PPT	歌紹介	M1620002	9:38-11:14	01:36
6	PPT	歌紹介	M1620002	13:29-15:06	01:37
7	PPT	Discussion	M1620002	16:10-17:50	01:40
8	読み上げ	Discussion	M1620002	18:20-20:29	02:09
2	PPT	歌紹介	M1620002	21:28-22:00	02:20
			M1620003	00:00-01:48	
1	PPT	歌紹介	M1620003	2:27-4:29	02:02
3	読み上げ	歌紹介	M1620003	06:00-06:42	00:42
4	読み上げ	歌紹介	M1620003	06:51-08:04	01:13
10	PPT	歌紹介	M1620003	08:23-10:46	02:23
9	PPT	歌紹介	M1620003	12:05-13:23	01:18
22	PPT	歌紹介	M1620003	14:17-15:10	00:53
21	PPT	Discussion	M1620003	16:11-18:32	02:21
16	読み上げ	歌紹介	M1620003	18:43-19:48	01:05
13	PPT	歌紹介	M1620003	20:47-21:37	00:50
14	PPT	歌紹介	M1620003	21:51-22:00	01:26
			M1620004	00:00-01:17	
20	PPT	LGBT	M1620004	01:51-03:28	01:37
19	PPT	歌紹介	M1620004	03:56-05:43	01:47

PPT=21名 読み上げ=7名 未発表=1名 合計29名

## ピアスーパーバイザーからのコメント

現在の大学教育においては学生の学習を活性化し主体的参加を促す授業形態、授業内容が求められている。この「英語コミュニケーション」の授業では学生が興味を抱きやすい映画を題材としてDVDを短時間視聴した後、英語と日本語によるプレゼンテーションを行うという試みが実施されている。学生の能動的な学習を促され知識や情報にアクセスする力が養われる結果となっている。2019年度と2020年度の教育効果の比較から、細かい情報の記載のあるルーブリックを用いることでリサーチ力やプレゼンテーション力が身につくことが明らかにされた。この論文から教育の質を保証するために目標に合わせて教育をデザインしていくこと、学習成果を様々な観点から把握していくことの必要性を改めて認識することができた。(担当:藤井裕子)